

-197- 慢性肝炎, 肝硬変から原発性肝癌の発生を核医学的検査法によって追跡しえた12症例の検討

岐阜大 放

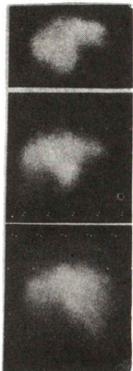
○今枝孟義, 仙田宏平, 加野敏光,  
浅田修市, 土井偉誉

慢性肝炎, 肝硬変であることを確認し, その後の経過観察中に原発性肝癌の発生を追跡しえた12症例につき肝シンチなどの核医学的検査法によって検討を加えたので報告する。

対象症例12例の肝癌発見時の年齢分布は46才から72才までで, その平均年齢は60.4才であった。性別は男11例, 女1例であった。慢性肝炎, 肝硬変と診断されてから肝癌が発見されるまでの期間は最短1年7ヶ月から最長8年6ヶ月(C, H, の例)の間にあり, その平均発生期間は3年3ヶ月であった。HBs抗原(RIA法)は4例が持続陽性, 8例が持続陰性で, 一方HBs抗体(RIA法)は5例が持続陽性で, 7例が持続陰性であり, 両者共に陰性が3例あった。肝癌発見時の最高AFP値(RIA法)は10例が $10^3 \text{ ng/ml}$ 以上であり, 残りは $375 \text{ ng/ml}$ と $20 \text{ ng/ml}$ 以下であった。経過観察中のAFPの変動は初め $20 \text{ ng/ml}$ 以下であるが, 経過と共に数ヶ月間 $100 \text{ ng/ml}$ 程度を維持し, その後 $10^3 \text{ ng/ml}$ 以上の高値を示した。肝シンチでの経過観察で欠損像を指摘しえてからの腫瘍は急激にその大きさを増大し, ほとんど6カ月以内に死亡した。肝癌発生部位は10例が右葉に, 残り2例は左葉に最初発見された。欠損像の数は2個以上のものが5例で, 単発性が7例であった。肝硬変の組織像はすべてZ型(三宅分類)で, 慢性肝炎は活動型であった。基礎疾患に肝硬変があることもあって, すべての症例が手術不可能であった。AFPによる肝癌の早期診断には問題が残るも, 肝硬変の経過観察中に陽性化, 急激なAFP値の上昇を認めたときは肝癌の発生を疑ってもよい結果であった。しかし, 今後更に肝癌発生の早期診断法の改善, 開発が望まれる。

(症例供覧) (症例1)

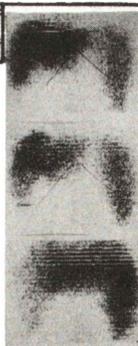
58才 男 肝硬変+肝癌 右側面像( $^{99m}\text{Tc}$ -phytate)



上段: S 50.6.25 施行  
中段: S 51.1.12 施行  
下段: S 51.4.24 施行

(症例2)

55才 男  
肝硬変+肝癌  
上段: S 45.  
7.15 中段:  
S 46.5.28  
下段: S 47.  
2.21



-198- 二核種使用による肝シンチグラムの臨床的検討

大阪医大 放

○河合 武司, 新宅 敬夫  
長島 功, 種子田秀樹  
小川 翼, 赤木 弘昭

[ 目的 ]

二核種使用による肝シンチグラムを臨床的に検討し, その成績を報告する。

[ 方法 ]

二種類のRI、 $^{67}\text{Ga}$ -citrateと $^{198}\text{Au}$ -colloidを組合せ, 前者は2日前に2 mCiを後者は検査直前に300uCiを静注した。

測定は, エネルギーピークの異つた二種類のRIをアナライザー2個をとりつけたガンマカメラ(ニュークリアシカゴ社製HP・6406型)によつて同時測定し, 中央演算処理装置( NOVA .001型.16K語)を介して, 記憶型ブラウン管表示装置へ上. 下二段で経時的に表示しながら記憶させ, データ保存の為磁気テープに記録した。

データ処理は, 中央演算処理装置にて演算処理, バックグラント処理を行い病巣部を陽性像として描画した。

対象は, 一核種による肝シンチグラムと, 臨床所見, その他の所見から腫瘍を疑つた症例について, 二核種による肝シンチグラムを実施した。

[ 結果 ]

二核種による肝シンチグラムを実施した45例中, 一核種のみでSpace Occupying Lesionと読影出来たのは24例(53.3%), S.O.L.が読影困難であつたのは21例(46.7%)であつた。前者の内3例(6.7%)が二核種で腫瘍を否定され, 1症例はのう胞であつた。後者の内5例(11.1%)が二核種で陽性像を得た。

[ 結論 ]

一核種による肝シンチグラムでS.O.L.が読影出来なかつた症例で二核種による肝シンチグラムで陽性像を得たのが5例あり, 一核種によるS.O.L.を否定したのは3例あり, 臨床上有意義な結果を得た。